

東京の生活史

— 内容見本

本文より冒頭部分抜粋

普通だよ。だから酒飲んでる。わかるでしょ。嫌だから。これ今のままで、忘れなさい。って言われている。「忘れなさい」。子供産んで、忘れなさいはできないんだよ

聞き手Ⅱ加藤雄太

やばいでしょ。それをなんで言わなかったのって。

—直美さんは養子として引き取られたということですか？

—養子縁組だった。施設からそういうところに。

—で、それまでおばさん（養母）とおじさん（養父）をお母さんとお父さんだと思っていたんだよね？

—うん。これを私が中学のときに言われて。

—それまでは気付かなかった？

—だって、気付かないって、向こうは知ってたってき、うちにはね、なんにも教えてくれなかつたんだもん。もう一人智子（直美さんと同じ家に養子として引き取られた）っていたのが、栃木から来てたの、には「私たちは本当の両親じゃないのよ」ってことを言ったくせに「あなたと智子は本当のきょうだいではないんだよ」って中学のときに言われて、向こう（智子）にだけ（本当のことを）喋ってなんでもうちは言わないのってそれも喧嘩した。

—養子には直美さんともう一人いた。いつ会ったの？

—小学校のとき。

—姉妹だって言われてたの？

—そう。

—で姉妹だっと思って接してきたの？

—そう。普通じゃん。うちが妹で、向こうが姉。

—じゃ、お姉ちゃんって呼んでたんだ。

—そう、だからお姉ちゃんお姉ちゃんって言ってたにもかわらず、全然違ってたってことなんだよ。でも施設から来た人たちってのはみんなそうなんだよ。びっくりだよ。

—でもおかしいなと思つたのが、小学校で向こう（智子）が喋つてるのを私黙って聞いて「何で本当のこと言わない？」（って尋ねたら）「何の話？」ってとぼけるから、私と大喧嘩になった、中学のとき。「あなたたち何考えてるの？」って口から爆発して、大暴れしてやった。普通でしょ。そしたらはぐらかした。全部、何もかも、向こう（養親）の言いなりになってた。「私はあなたたちの機械じゃないんだ」って。ね、やるだけのことやって、ね、おばちゃん（養母）がね、したと、あなたに振り回されてたんだから、こういうことはしすよって感じだった。養育家庭だと、施設から預かった子っていうのは申請すると国から一八歳までお金が支給されるから。—だから二人（直美さんと智子）を養子として家に？

—うん。吉田智子の実の母親は、生きててね、お兄さんもいるのに「この子（智子）を受け入れられない」って。それで施設へ送っちゃったわけ。児童相談所へ。

—で私は私で、あの、まだ赤ん坊で、タオルにくるまれて外に置かれてた。下手すりゃ死んでた。うん。かわいそうだったよな。そこ

を引き取ってくれたのが、北海道の人だったわけだ。そこから施設預けられて一年、二年いたのかな、違うよ、児童相談所から、施設入り込んで、一、二年いて、二年間いて、一年のときはだから、いや違う、一年くらいしかいなかったんだ、たぶんうち。ほんとに短かった。うん、で児童相談所へ行ったのが、一年くらいだ。幼稚園一年生。

—その記憶もあるんだ。
あるよ。

—そのときはご飯とかどうしてたの？
相談所。

—お父さんお母さんはどこと考えたりもしてた？
自分が母親だって言い方だった。

—あ、相談所の人もお母親代わりだよみたいな言い方なんだ。

—そうそうそう。だけどそのあと引き取ってくれた人が岩手の人で、私はこの人たちを両親だと思ってたの。

—お母さんって言われたら、そりゃ信じるよね。

—普通でしょ。だって小学校から、会社の寮じゃないけど、そこに住み込んで、そこから学校まで三〇分以上永遠に歩くんだよ。すごいでしょ。朝なんか、遅れると自分で行くんだけど、まだかまだか、まだかかって着かなかったんだから。三、四〇分歩くんだよ、まだあるのーみたいな感じだった。

—都会にいて、田舎の学校通ってるみたいだった。周り何もなかったの。幼稚園がまわりにあつて、その横に研究室があつて、そこで遊んで、えれえ怒られて。お仕置きだって言われて、その跡がこれだよ（左手の甲にできた傷跡を指差す）。お灸据えられて。

—え、痛い。

うん。そっちに入っちゃいけないって言われてたんだけど、池ぼちやになつて遊んで、入ったらお灸据えられた。

—悪きするところいうことなるんだよって（養母が）えれえ怒つてたよ。もうそのときにはほら、おじさん（養父）も亡くなった。なんで亡くなったかって言ったら、一般人に射殺された。

—え、養親のおじさんが？

うん。はるか後になつてからなんだけどね、聞いたのは。まあでもね、施設の人ってみんなそういうもんなんだ。親だと思つて騙されるの。「お前にはまだわからんわ」って言われて。

—何その言い方みたいな。私がそこで暮らしてて、その言い方されたのが一番嫌だった。それにもう一人のその吉田智子ってのはうちにもなんにもやらなかったからね。えらい怒つたよ。こっちは進んでやるんだよ。頭きたけどね、全部ひっくり返してやったよ。皿は割るわ、ガラスは割らなかつたけど。

—一応（智子を）お姉ちゃんと思つて接してたんだよな？

うん、だけど、同い年だったから。学年も一緒だったの。「似たような顔してんだから、丁度いいでしょ」ってそんなふうと一緒にさせられてんだよ。悪質だべ本当に。「相当騙してくれるねこのおじさんお婆さんも、意味わかってないの私だけでしょ」って（言ったら）「いやお前がわからんでも私たちが知つてたらそれでいい」って。「じゃ何うちは？」って。ね、いいよ、それで地獄見るのそっちだからね。何がクリスチャンだよって話だよ。そうやって人騙しておいて、ね、生活保護だ、あの、里親の権利もらつたんだって随分ひでえことするね」って私は言った。「大人になつてみねえとわからんぞ」なんて言われたけど。

—大人になつてみないとわからんんで、なんで（本当の親でな

(……)

自分の欲に何万もかけて来る人がこんな世の中なのに、なんでお金のない人とわざわざ付き合ってるんだらうって思ってた

聞き手〓小池エリナ

—このお仕事は何歳ぐらいから？

—二四ぐらいからだと思えます、なので四年前ですかね、(いま)二八なんです。

—じゃあけっこう長いというか、

—そう、ですね。ただ二四から二年半くらいやってそのあと、ほんと、ちょっとずつしか出なくなっちゃったんで、最近一二月に出るまで半年？ 違うな、一年ぐらい出なかつたんですかね……休みになっちゃって、出づらくて。

—普段昼間のお仕事別に何かしているんですか？

—えと、普段はしてはいるんですけど、あのえっと、お給料が固定じゃなくて、ほんとにお小遣い稼ぎみたいな感じで、いまあの絵の先生をしているんですけどそれも週一で、月に換算すると一万円いくかないかみたいなき感じなんです……当時の預金で生きてます(笑)。

—当時のお金けっこう貯蓄に回されてたり？

—そう、あ、いやそうではなくて自分では遊んでお金使っていたつもりだったんですが、それ以上に貯金してたんで思いのほか貯まってる。

—すごい。

—ふふ、生きてます(笑)。週六とかで出勤してました(出てた頃)、

—週五、週六。一日三、四人。

—けっこう、じゃあお休みなくもう毎日、すごいですね。やっぱもう若さですかね。二〇代中盤で。あと体力づくりで運動もしてたんで。元気でした。

—習い事とか？

—当時キックボクササイズをやっていた。

—体を動かすのが好きなんです。

—うん、いまはより本格的になりました、それだけがして(お店を)休んだりとかしてました。骨折ったとか。

—痛そう。

—痛かったですね。呼吸できませんでした、まだ若干痛いんですけど。

—体力には自信が？

—あります。あと楽しかったですね。そう、おうちにいるぐらいだったら出勤したいって思っていました。

—子どもの頃から美術には詳しいとか好きなんですか？

—そうですね、ずっと絵描いています。

—小さいときから？

—ネクラだったんで……しゃべりだすのに時間がかかるんです。考えてしゃべるから。考えないでしゃべるとすごい、たぶんニュアン

スを大事にする感性の人間なんで、なんか発言すると人に伝わらない細かいことだったりしてなにゆつてるのか、え？って聞き返されることが多いからしゃべんの嫌になっちゃったんで。ずっと絵描いてました。友だち少なかつたです。

—お生まれは？

東京都下です、町田市。

—ご両親もアートや音楽が好き？

そうですね、父は絵を描くの手で手先が器用なんですけど、父方の祖父もなんかえつとんていうんですかね、文学が好きだったりハーモニカ上手だったり芸術系なんだと思います。母も、母は絵は描かないんですけど手芸だったりするの好きなんで、こまごました作業好きなんです、みんな家族。弟もいるんですが弟も器用です。

—美術系に進まれるきっかけ？

都立の高校があつてそこは数学が三年間で数Ⅰしかなくて数Aも数Ⅱもないんですね。それが勉強ができなかった私からするとかなり魅力的で。それでじゃあそこ入ろう数学やらなくて済むからっていう、そんな理由で。

—数学やらなくていいっていう？

そうですね(笑)、逃げです(笑)。

—部活は実技が多かつたですか？

多かつたです。三年生は週に一〇時間美術部の時間がありました。一日二時間。水曜なかつたから金曜四時間か。プラス放課後も作業してたから。ずっと美術やつてる感じですよ。ほかの授業寝てたし(笑)。

—部活の子たちもみんな絵がうまかつた？

みんなすごい上手で、個性的で、さつきあの、その幼少期なんか

言うのと何言つてんのって返されちゃうようなかわいそうな子が集まつたんでみんなすごい感性が合うつていうか。んーと、おもしろくて話が合つて仲良かったです。変な子多かつたです。(音楽) 何聴いてるの？って聞いたら世界中の国歌聴いてるつて(笑)。え、そんなCDあるんだつて(笑)。

—楽しかつた？

楽しかつたです、すごく。一番楽しかつたです。高校が一番。

—美術部に行かれて、だいたいの子は美大とか専門学校に行かれるんですか？

そうですね、美容も多かつたんですね。ネイルとか美容師とかの道に進む子とかも。けっこうばらばらでしたけど洋裁とか。やつぱりデッサンを高校で習つたんですけど、それが生きるような道に進む子が多かつたです。

—美大の試験ってどんな感じ？

センターも必要なところもあるんですけど、私が行つたところは国語と英語、あとは色面・デザインだつたんですけど、デザインは色面構成つていつて絵の具でこう、なんていうんですかね絵具でこう、色で画面を構成するんですけど、その色塗りの丁寧さとか、あの、なんていうんですか、色のバランス、配置とかそういうところを見られます。あとはえつと、私たちはなかつたんですけどデッサンとかも必要になってきます。藝大とかはデッサンです。

—藝大と美大つて違うんですか？

一緒なんですけど、あの東京藝術大学……藝大生は美大つて言われたくないのか、なんなのかわからないんですけど、最高峰なので、東大みたいな感じですよ。そこは高い、レベルが違うんですけど。でも、一緒ですよ(笑)。

(……)

まず上海で二週間隔離を受けた。そのあと武漢に行った。お母さんとお父さんは、僕を迎えに来てくれた。武漢の駅から出たとき、僕は涙を流した

聞き手||齋藤あおい

「今日はありがとう。上海で会って以来だね。この一年は留学生にとって、とくに大変だったよね。」

うん。コロナ禍はやっぱりこの一年の始まりみたいなもので、ずっと自分の状況に影響し続けるような感じが、すごく強かった。

最初は、今年(二〇二〇年)の一月がはじまったばかりの頃、中国のメディアで武漢のコロナのニュースが出てきた。でもそのときはみんな、そんなに警戒感がなかった。人から人への伝染がまだ確認されていなかったから。でも一月の中旬、僕とAくん(パートナー)は旅行に行ってたんだけど、日本のニュースを見て、日本でも中国人の感染が確認されたというのを見た。そういうことでちょっと、あやしいなと思いはじめた。

すべてのことは一瞬で爆発したみたいで、僕たちが一月二二日に東京に帰ってきたその翌日は、中国の(旧暦の)一年の最後の日、「除夕」(大晦日)。「家団欒の日」なんだけど、その前日、人から人への感染が確認された。すごくショックで。みんなが一瞬で、二〇二〇年のSARSみたいなことが起きているなって。

一月二二日に、人から人への感染が確認された。突然、すごく警戒感が上がってきた。次の日が除夕で、その日の朝いちばん、武漢が「封城」(ロックダウン)になったと、ニュースがあった。今も、当時の心境を思い出すと、自分のいちばん馴染みあるところだから、

想像できない状況になってきて、かつ、中国の一年においてもっとも重視される新年に、そんな状態になるんだなって思ったら……。

二三日は、まだ武漢だけの状態だとみんな思っていた。でもその三日後? 僕の生まれたB市でも……一週間くらいで、湖北省のすべての都市がロックダウンされるようになった。小さな都市がロックダウンになるというニュースが、自分としては、一番やばいなと思ったときですね。若者は中高年の人に比べてわりとネットのニュースを頻繁にチェックして、一番新しい状況を知るので、いまだそれほど悪い状態なのかは、若者のほうがもつとわかっている状況だった。

でも僕のお父さんお母さん、そしてもつと上の世代の人は、ロックダウンされる前は警戒感がそんなになかった。中国の若者は、ずっと両親とか、上の人たちに言い聞かせていた。「集まるのもだめ」、「パーティーとかもやめてほしい」って。でも、中国の伝統的な雰囲気としては、新年なのに親戚が、家族が集まらないなんて……! 日本人は想像できないと思うけど、(中国では)小さな町であるほどこういう考えが強い。

「集まらないといけない?」

そうそう。でも僕の両親は、そんなに頑固じゃない人だから。「除夕」だけ少数で集まったけど、その日以降はずっと家にいま

した。ひと安心した。あと、僕は武漢がロックダウンされてから、一、二カ月くらいの間、ぜんぜん勉強の状態に入れなくて。毎日、いちばん時間をかけた作業はスマホのチェック(笑)。ずっと、ニュースをチェックし続けた。そのときネット上で誹謗中傷みたいなことがあって、心が痛かった。

なぜかというと、武漢は中国で一番真ん中に位置するので、そこを經由して春節のときに人の流動が多くなる。もともと武漢は交通の要所であり続けてきたし、春節のときはもともと、人出が……。

— 増える？

そう。あと、武漢は中国の内陸部で一、二番の大都市なので。春節のときにそこから帰省する学生や、出稼ぎ労働者とか、すごく膨大な数になる。でもそれはしょうがないし、みんなもしその人の立場になったら、春節のときは帰るだろうって。ロックダウンというニュースをみたら、もつと早く帰りたい、早く外に出たい。それは、別に正しくないことではない。でも、ネット上ではそういう人のことをいろんな人がのしっている。

なぜこういうネット上での炎上になったかというところ、ロックダウンされてもあの手この手を使って(武漢から)出てきた人のことを、SNSで書かれたら。それ見たら外の人には許せないと思う。でも、どっちの立場も理解できる。しょうがない状態ですよね。

あと、武漢の状況を最初に伝えた医師が、二月の六日に亡くなりました。そのニュースをみて、中国人としても、コロナの状態に悩んでから、一番……日本語で表せないな。これは、自分としては、その二カ月間ずっと苦しかったこと。病院現場の看護師が泣きながら、元旦から二週間経っても、子どもに会えなかったとか、こういうビデオを見て、すごく心が痛かった。医療現場にいないといけな

いと、責任を感じている看護師がすごく多い。

日本にいる中国人として、日本人に伝えたいこととしては、コロナのニュースを受けてから、中国以外の世界がひどい状態になる前、世界中にいる中国人の留学生、華人、華僑たちは、SNSで、マスクを買って国内に送りましょうという活動を、世界中で行った。中国人のナシヨナリズムみたいなものじゃなくて、ただ同胞としての愛。湖北省の医療現場はすごくマスク不足だったから、自分のお金でマスクを買って国内に送る。

でも、日本ではそれが、「中国人はマスク爆買したよね」って、悪い口調で。でも、その背景にある、なぜ留学生がマスクを集めたのかという状況はきつと理解されない。理解がないのに、留学生たちの行動を歪曲する。このニュースを見たら、ああって。なぜ、中国のいいことは伝えないんだろうって。苦しい状態にいて、留学生たちは小さな力でも貢献したいと思っていたのに。世界中で、みんな一緒にがんばっているのに、なぜそう言われるのか、わからない。もうひとつ伝えたいのは、武漢がロックダウンされてから、全国の病院からお医者さんと看護師が湖北省にきて、リスクを冒しても、当時の地元病院のお医者さんたちと一緒に、湖北省のそういう状態をなんとか乗り越えていこうって(頑張っていた)。

でも、こういうことは日本では見えない。中国の動きは見えない。ただひたすら、悪いものを報道する。それは留学生たちはすごく傷つく。

海鮮市場で感染が始まったっていうけど、「野味」ってわかる？
ふつうは食べない肉類のこと。

— ジビエみたいなものかな？

そういう肉を食べているからそんなウイルスが出たって(いう言

(……)

「なんか見つかるんだよね」「そうね、ほんとそう。必ず見つかるんだよね」

聞き手 || 長倉崇宣

—生まれって、どこなんですか？

生まれは、駒沢なんですよ。で、その後、等々力。二〇歳くらいまで。幼少期はずっと等々力で育って、二〇歳くらいから上馬。

—二〇歳のときは、独り暮らし？

いや、違いますね。家で。オヤジとオフクロが家買つて。

—へえ……。どんな感じの子ども時代なんですか？

子どもんときは……とにかく、多動がひどくて。こういうところ（ファミレス）来るじゃないですか。ダーツと走って、厨房入つて

って、怒られて……。で、ウチのオフクロは、あの人もADHDなんで、そんなの全然大丈夫なんですよ。いろんな大人に怒られても、ウチのオフクロは平気で頭下げる。だからずーっと謝ってる姿を、ずーっとずーっと見てきて。謝ってる背中を。

幼稚園も、芸能人の子どもとか、あと、〇総理大臣の娘さんとか、そういう一流の人たちが来る幼稚園にいたんですよ。

—そういうハイソなところに。

（妻） 超セレブだよ。

セレブ。ウチのオフクロはイラストレーターやってて、ウチのオヤジはH堂の……外資の入っているところのCMクリエイティブディレクターやってて。しょっちゅう海外行つてて、ほとんど家に入らない状態。で、オフクロはオフクロで自分の好きなことを中心にし

きている人だから。そこにオマケみたいにいる子どもたち、みたいな。はは。

幼稚園のとき、だから、そういう有名なそういう人たちがいるところで、喧嘩ばかりしてた。とにかく……何かを解決するため喧嘩、みたいな。はは。それがずーっと続いて。そう、そういう感じだった。だから、小学校に上がってもやっぱりそういう感じ。小学校のときは、もう、ずーっと喧嘩ばかりして、先生からピンタとか、げんこつってのはしょっちゅう。

ただ、卒業のときに、「お前も、中学校上がったら喧嘩すんなよ」って言われて、その言葉がずっと残ってた、なぜか。だから、中学校上がったから、（喧嘩が）止まったんすよ。なんか、止まったんすよ。学校の中では。そうそうそう……。

ま、大人になってからADDっていう多動じゃないタイプになっただんだと思うけど。ほんと、ADHDの典型的なタイプ。今でもそうなんですけど、（こうやって）話してるじゃないですか。でも、急に気になるものがバツであるともう、それを言葉にしちゃったりするんですよ。だから、コイツと真剣な話しても、「ちよつと待って、あれ何？」とか、途中話変えちゃったりとか。

—そういうのに、自分の中で折り合いをつけられるようになったのって、思春期越えてからですか。

そうすね……周りとちよつと違うなどは思つて……中学校二年、三年くらいになつてから、自分と他の周りの人たちとの違ひつていうか、そこに不安はなかつたんだけど、「あ、なんか違う」つていう。先生はだから、あんまり戯れてギヤーギヤーやらない俺を、なんか信頼してくれて。……そうすつと、みんなとの溝がどんどん、そんなときに、寂しいなどは思つた、初めて。「なんでだろうな」つて。「なんか寂しいぞ」つて。

その後、高校行くじゃないですか。で、N大付属のT高等学校つてと……前年度まで、美術部つていうのかな、進学部と二つのコースがあつて。「あ、美術部ある、いいじゃん」つてそつちを選択したいがゆえにそこ入つたんだけど、その年からなくなつたんです。ただの進学校。そこがもう合わなくて。だからもう、やめたんです。で、やるべききっかけつても、やっぱりもう、ほんとんどグレちゃう、グレルつていうか、なんていうんだろ反発的になる、進学校のやり方に。「こんなとこにいてもしょうがない」みたいな。で、昔いたじゃない、体育の先生でものすごいこう……暴力振るう。

——どの学校にもいましたよね。

そう、で、教室でみんなの前でボコボコにされて、そしたらオフクロが「そんなとこやめなさい」つて。

——ありがたいですね、その一言は。

「そんなとこ、すぐやめなさい」「よかつたよ、そんなとこ行かなくて」つて。んで、その後、音楽の専門学校。そこ行つて、音楽に没頭して、楽しかつた。バンド組んで、俺、ズーッと練習してた。たまにレコーディングしたりとか。楽しかつたね、今考えると。

ちよつと（話を）戻すと、中学校三年の後半で、俺のこと気がかけてくれた友だちがいて、やつとなんか、ちゃんとした友だちがで

きて。で、学校で酒飲んでたり。いろいろ……ま、タバコはもちろん、つていうことをしながら、一六のその高校入つたぐらいから、いろんな薬物に手を染めはじめて。

——はい。

最初はね、ラッシュユつていう小瓶で、普通に、洋物雑貨屋さんで売つてたから。

——へえー。

——違う名目で。植物のナントカ剤、みたいな。

——わかる人にはわかる。

そうそうそう。んで、それで買つてみんな、楽しんで。そこからマリファナ行つて、友だちがゴーと買つてきて、こんな。で、みんなやって。んで、そこまではみんなついてくるんです。マリファナ、コカインくらいだったから、まだ正常を保てる。で、その後、覚醒剤やるようになってから、ドンドン脱落して。みんな、おかしくなつて。みんな、被害妄想が出たりとか、捕まっちゃつたりとか。

で、なぜか知らないんだけど中学校のときに僕に声をかけてくれた男の子つていうのが、絵が異常に上手くて、物づくりがすごい大好きな子で、んで、その子と一緒にズーッとやってた、薬を。で、覚醒剤に辿り着いたときに、その子は、「あ、これで生きていける」つて。

——へえ……。

えつとね、元々体が弱い子。で、あちこち疾患がある。だけど、それをやつてるとき、やつと目が醒めるような感覚があつたつて。ま、もちろん、まやかしてつていうか、あの、エネルギーの先使いなだけなんだけど。

(……)

だから私と地球の戦いはまだ続くねん

聞き手 東万里江

生まれは、大阪府大阪市（涙ぐむ）東住吉区、山坂、××丁目。古くて、二階建ての家、日本家屋、ガラガラガラって開ける木のポロポロのドアが玄關について、入ったら三和土さんわどになって、ママが乗ってたむちやでつかいかっこいいバイクが置いてあった。ヤマハかなんかの。

おじいちゃんが、オートレースっていうか、バイクがすごい好きで、ジープとかでつかいバイクとか派手な乗り物が好きな人で、ママはおじいちゃんのことのがすごい嫌いやったのに、たぶん影響されて、たぶん女の人に乗るにはすごいでかいバイク乗ってて、それ乗って、仕事とか行ってるってかっこよかった。

ママはすごいメルヘンっていうか変な人で、家の和室の、押入れの紙、紙っていうかなんていうのあれ障子っていうか、壁紙？ 押し入れのさ、こう貼ってる紙？ あの紙をぜんぶひっぺがして、自分が好きななんかテキスタイルの紙を貼ってた。布かな？ 壁紙っていうのかな、こういう押し入れの、この、ふすま？ ふすまを自分の好きな、なんかも貼ってた、すごい派手な。そういうところで生まれた。そこが一番好きな懐かしい場所。

そこにずっと家族でいて住んでたけども、妹がお嫁に行って、弟も留学したり結婚したりしていなくなつて、私とお父さんとお母さんだけになって、で、そうこうしているうちに帝塚山てづかやまのマンショ

ンに空きが出て、お父さんとお母さんそっちに行つてしまつて、私だけがその家に取り残された。

別のとこに住みついて言われたり、帝塚山のマンションに来るかつて言われたりしてたけど、私が生まれた家やし、家族で住んでた場所やのに、四人ともみんなその土地を見放して、いなくなつてしまつて、私だけが最後まで、家具もなんもない、全員が引越した3LDKで、一人で二年か三年、住んでた。テーブルも何もないから、アイロン台でごはん食べてた。ラグマットもないから、バスタオルひいて、座ってた、その上。がらんとして、部屋がぜんぶ余ってる、ずっとリビングの真ん中に一人でアイロン台とバスタオルの上にぼつんといて。テレビもなくて、Macだけ、パソコンだけ。――そこから、そこ、出たんだっけ？

うん。いれるまでいてやろうの限界までいたんやけど、無理になつて。で、どっか探すにも、私は大阪市東住吉区山坂××丁目から出たことがないから、怖くて。

私はあの街がすごい好きで、私の人格を作ったものぜんぶがあの街にあつて。なんか家のさ、家から歩いて三分くらいのところ長居公園っていうめっちゃでかい公園があつて、私は春も夏も秋も冬も、おむつして歩けるようになったらその公園を歩きまわつて、落ち葉を踏んだりチューリップを触つたり、雪が降ったら見に行つた

り、そこでタンポポの綿毛を吹いたりして、そこで四季を感じて育つて、木の名前覚えたり。

そのこの近所の、すごい古いちっちゃい図書館があつて、そこにも赤ちゃんのときから通つて、そのちっちゃい図書館の本を、端から端まで本当にぜんぶ読んで、もうどの本がどこにあるかわかるくらい、もうぜんぶ読んで毎日通つて。そのあいだお母さんが近所の商店街で買い物してんねんけど。その図書館の本を読み尽くしたつていうのと、長居公園の四季を歩きまわつたつていうのが、私の感受性の全部を作つて、だからそんなところ離れられないつて思つて。

とにかく離れたくなかつたから、おんなじ東住吉区の中で探したり、あともつと全然違う、谷六（谷町六丁目）がめっちゃいいでつて言われて、谷六にも行ってみたけど、やっぱり無理つていうか知らん街、いくら人気があつても、私にとつては、いいところではあるけど。なんか知らん街つていう感じで、無理で。やっぱり東住吉区の山坂の近くじゃないと無理だつてなつて。

ほかにいい部屋いっぱいあつてんけど、山下さん自分が馴染みがある土地じゃないと絶対住みたくないですわねつて不動産の人に言われて。言われるまで、たしかなことやつてんけど、わからんくつて。言われてから、あ、てなつて。そうですわね、つてなつて。今あの土地離れたくないとかめっちゃ言つてるけど、それは不動産屋に言われてから、気がついたつていうか。

—その、のんちゃんの大阪に対する思いとか聞いてたから、東京来ると聞いてたときにすごい私びつくりして。

ふふふ。うん……なんか、ミクシイが悪いねん。

—ふはははは！

今のパートナーがミクシイで日記書いてて。そんなとき私は、今のパートナーに好意を見せてもらつたけど、相手がなんか、まあ一応、女の人つていうことで、そのときの私は、アライじゃなかつたつていうか。アライ、つてなんかこう、いろんなこと多様性認める人つていうか、そういうの理解してる人つて意味？ ちよつと正しいかわかんないけど。

普通の、なんか、ガチガチな頭の凝り固まつた人間で、すごい好きやつたけど、どうしたらいいかわからへんくて。男の子の恋人と普通に付き合つたりしてて。好意を見せてもらつたけど、お断りして、自分がアライじゃないから。ちよつと自分、好きやつけど、自分も女やのにあの人も女やのに、てパニックなつて。

あんとときの気持ちもちよつとよく……なんかやつば固定概念で怖いなと思つて。絶対男の子と付き合わないといけなつて思つてたから。

で、ごめんさい、じゃないけど、付き合つたりできない、てなつたあとに、パートナーが新しい人と出会つていうか、もともとお友だちだった人とお付き合いして、その日記をミクシイにあげて、それが東京の下町でのすごい幸せそうな、夕ご飯買いに行つて散歩してる、みたいな日記書いてて。それ読んだときに、めっちゃ後悔して。後悔つていうか、もうむっちゃ悲しくなつて。

なんか、いいな、て思つて。自分は恋人おつたけど、なんやろう、あつちの、その人たちが歩んでる世界が、めっちゃ憧れて。私その恋人のことはめっちゃ好きやつたけど、あれなんか、違う、違うことしてるんかな、みたいな気持ちになつて。で、それをけつこう、引きずることになつて。そんな引きずるつて自分で思つてなくて。

だから東京といえはその人で、その東京での下町での様子でつて

(……)